

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00640

研究課題名（和文）英語・日本語における数量詞作用域の決定に関わる統語的要因についての理論的研究

研究課題名（英文）A Theoretical Study of Syntactic Determinants of Quantifier Scope in English and Japanese

研究代表者

本間 伸輔（Homma, Shinsuke）

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：40242391

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：生成統語論の観点から、英語と日本語における数量詞句（以下、QP）の作用域を決定する構造的要因についての研究を行い、以下の研究成果が得られた。第一に、目的語QPの作用域を決定する要因として、目的格を認可する仕組み、目的語の「前提性」と呼ばれる意味的性質という観点から提案を行った。英語、日本語、オランダ語の目的語の振る舞いを比較し、オランダ語で移動を引き起こす構造的仕組みを仮定することによって、日本語の目的語の作用域特性を説明した。さらに、外項・内項QPの作用域を決定する要因に関して、受動文におけるQPの作用域について考察し、直接受動文の主語と所有者受動文の目的語の作用域特性の説明を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、数量詞句の作用域という、ことばの意味に関する現象について考察を行い、それに関与する統語構造的要因は何かという問題を探る研究である。ことばの意味とはそれ自体で存在しているものではなく、文の構造により生み出されたり、意味解釈のしかたが構造による制約を受けることがある。このような意味と構造との密接な関係性について、数量詞の作用域という限定された範囲ではあるが、具体的に明らかにするものである。

研究成果の概要（英文）：In this generative-syntactic research I have studied syntactic determinants of scope of quantified phrases (henceforth, QPs) in English and Japanese. As one of the main achievements of this research, I have made a proposal on the way in which Objective Case and the semantic property called "presuppositionality" determine the scope of object QPs. In this proposal, I have compared the objects in English, Japanese, and Dutch, and accounted for the scope of Japanese object QPs by assuming a syntactic device that triggers movement of objects in Dutch. I have also considered syntactic determinants of external and internal argument QPs. I have focused on the syntax of passive sentences in Japanese, and accounted for the scope properties of the nominative subject in direct passives and the accusative objects in the possessor passive sentences.

研究分野：言語学

キーワード：数量詞 意味 統語論 日本語 英語 作用域

1. 研究開始当初の背景

英語および日本語の数量詞作用域に関する研究は、これまでに多くの研究が積み重ねられてきたが、統語構造上の要因のうち何がどのように作用域決定に参与するかは未解明の部分があった。とりわけ格素性や主題・焦点素性などの要素の移動を駆動する素性は数量詞の作用域の取り方に大きな影響を与える要因と考えられた。また、名詞句は意味役割の違いによって文中の異なる位置で併合されるが、この併合位置(特に外項、内項の違い)が作用域解釈に影響を与える可能性も大きいと考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、生成統語論の観点から、英語と日本語における数量詞句(以下、QP)の作用域を決定する統語的要因、とりわけ 1. 格素性の QP 作用域決定への関与のしかたの解明、2. 外項・内項 QP の認可方法の違いと作用域特性の関連性について考察を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

主に、文献による先行研究のサーベイ、学会出席による情報収集および発表に対してフィードバックを得ることによって研究を行なった。学会発表資料と論文の作成等は大学研究室に既存のパソコンを用いた。

4. 研究成果

4.1 格素性、前提性の QP 作用域決定への関与のしかたについて(本間(2019a, b), Homma(2021), Homma(2022))

本間(2019a, b)では、日本語の目的語 QP の作用域と格素性および前提的解釈の関連性について考察し、格素性および前提的解釈に関わる統語素性の認可によって QP の作用域が決定される仕組みを提案した。さらに、他言語の目的語 QP の振る舞いによってこの提案が支持されることを示した。

日本語では、目的語 QP が主語 QP の前に移動する場合、その目的語 QP が主語 QP よりも広い作用域をとることができる。しかしながら、数量詞が遊離している目的語 QP (以下 NP-FQ) は、広い作用域をとることができない。

- (1) a. 2つのボールを誰もが蹴った
[多義的: 2つ > 誰も, 誰も > 2つ]
- b. ボールを2つ誰もが蹴った
[非多義的: *2つ > 誰も, 誰も > 2つ]

しかしながら、NP-FQ でも元の目的語位置で否定よりも広い作用域を取ることは可能である。

- (2) a. 警察は3人以上の逃亡犯を逮捕しなかった。
[多義的: 3人以上 > ない, ない > 3人以上]
- b. 警察は逃亡犯を3人以上逮捕しなかった。
[多義的: 3人以上 > ない, ない > 3人以上]

ただし、遊離数量詞がホスト名詞句よりも前に現れる場合(FQ-NP)は、広い作用域がとれない。

- (3) 警察は3人以上逃亡犯を逮捕しなかった。
[非多義的: *3人以上 > ない, ない > 3人以上]

以上の事実は、(2a), (2b), (3)の目的語の3種類の形式の認可のされかたの違いという観点から説明される。(2a), (2b), (3)の3種類の目的語は「前提性」と呼ばれる意味的特性において異なる。(2a), (2b)は特定の集合の一部の逃亡犯を指すという解釈(前提的解釈)が可能だが、(3)のFQ-NPはこの解釈ができない。

以上を説明するために、動詞句(VP)および否定辞の投射の外側に、Shibata(2015)に従い、目的格を表す形態素「を」の統語素性[Prt]を認可する投射である PrtP (Particle Phrase) を仮定する。さらに、この投射内では、格素性の他に前提性を認可する素性[Pres]も現れると仮定する。

- (4) [TP DP-ga [PrtP DP-o [NegP [VP t_i [VP t_j V]] Neg] Prt] T]
[Prt][Pres]

前提的解釈の目的語は PrtP に移動し[Pres]素性を照合することが可能であるが、非前提的目的語は格素性[Prt]のみの照合しかできない。さらに、[Pres]のように意味解釈に関わる素性のみが作用域決定に参与すると仮定することによって、前提的なQPが否定よりも広い作用域がとれることが説明される。

以上の[Pres]素性の存在、そしてそれが移動を引き起こす働きをもつことはオランダ語の目的語の振る舞いによって支持される。

- (5) a. dat de polite gisteren veel taalkundigen opgepakt heeft
that the police yesterday many linguists arrested has

- b. dat de polite veel taalkundigen gisteren opgepakt heeft
 that the police many linguists yesterday arrested has
 ‘that the police arrested many linguists yesterday’ (De Hoop (1996))

(5a)では目的語 *veel taalkundigen* が目的語位置にあるのに対し、(5b)では副詞の左側に移動しているが、(5a)の目的語が前提的・非前提的両方の解釈を持つものに対し、(5b)では前提的解釈しか許されない。このことは、前提的解釈の目的語の移動のみを可能にする統語的素性の存在を示しており、上記の提案を支持する。

Homma (2019b, 2021)では、次の(6)の事例を出発点として、上記の分析をさらに発展させる分析を行った。

- (6) a. ジョンが 急いで 売れ残った本を 3冊返した
 b. ジョンが 売れ残った本を急いで 3冊返した

(6a)の「売れ残った本を 3冊」は前提的・非前提的両方の解釈が可能であるのに対し、(6b)のように「売れ残った本を」と「3冊」の間に副詞が介在すると前提的解釈のみが可能になる (Ishii (1997, 1998))

本間 (2019a) の分析を修正し、(7)のように、格素性と前提性の認可を別々の投射で行う構造を提案した。

- (7) [TP DP_{SUBJ} [vP ... [PresP ... [PrtP ... [vP DP_{OBJ} V]]]]

PrtP への移動は格素性の認可のためなので、格助詞を持つすべての目的語が移動するが、PresP への移動は前提的解釈の目的語のみである。(6a)の「売れ残った本を 3冊」は PrtP までの移動でも PresP に移動してもよい。これによって前提的・非前提的両方の解釈が説明される。一方、(6b)のように副詞が介在する語順では「売れ残った本を」の部分が PresP に移動する必要があるので、これによって(6b)が前提的解釈のみになることが説明される。

以上の本間 (2019a, b) と Homma (2021)の成果の一部は、Homma (2022)の一部として組み入れた。

4.2 外項・内項 QP の認可方法の違いについて

本間 (2019a, b) と Homma (2021)で提案した機能範疇 PresP は、目的語の認可および作用域の決定において重要な働きをする。しかしながら、vP において併合される外項主語は、vP が PresP の外側にあることから、PresP は経由せず、専ら vP の外側の TP においてその作用域が決定されることになる (Homma (2022))。これに対し、内項である目的語 QP は、PresP おける作用域決定と、スクランプリングによって主語を超えて移動する場合の TP での認可 (Homma (2022)) の 2 種類の認可方式がある。

以上の外項・内項の違いに関して興味深いのが受動文の主語の振る舞いである。Homma (2019)においては、直接受動文の主語の作用域について注意深く観察を行い、従来から仮定されてきた受動文主語の派生にとって一見反例となる作用域の事実が、反例ではないことを示した。

- (8) a. 太郎が花子がすべての審査員に褒められた。[or > every, *every > or]
 b. 太郎が花子がすべての審査員によって褒められた。[or > every, *every > or]

Kuroda (1979), Hoshi (1991, 1999)では、(8a)のような「に」受動文の主語が、基底で主語位置に生成される [併合される] のに対し、(8b)の「によって」受動文の主語は、目的語位置からの移動であると分析している。これが正しいとすると、(8a)の主語は「に」句より狭い作用域がとれないが、(8b)では狭い作用域が可能であることを予測する。しかしながら、この予測に反して(8b)でも主語の狭い作用域の読みは得られない。

このことは一見 Kuroda (1979), Hoshi (1991, 1999)の分析への反例となるが、事実観察をより注意深く行くと以上が反例ではないことがわかる。

- (9) a. 2人の学生がどの先生によっても叱られた。[2人 > every, every > 2人]
 b. 2人の学生がどの先生にも叱られた。 [2人 > every, *every > 2人]

以上のように動作主を表す「NP-に / NP-によって」の部分全体に「も」を付加することによって、主語 QP の作用域の取り方の違いが生じる。(9a)では主語 QP が「どの先生によっても」よりも狭い作用域をとれることから、「によって」受動文においては、主語が動詞句内から移動したことが示唆される。

さらに、Homma (2020)においては、日本語の所有受動文の目的格名詞句 QP の作用域についての観察を行い、目的格名詞句の派生に 2 種類あること示唆した。

- (10) a. 山田議員が2つの法案を先輩議員によってすべての登院日に反対された。
 [多義的: 2つ > すべて, すべて > 2つ]
 b. 山田議員が2つの法案を先輩議員にすべての登院日に反対された。
 [非多義的: 2つ > すべて, *すべて > 2つ]

この作用域特性の違いは、所有受動文の目的格名詞句の派生が「に」受動文と「によって」受動文とで異なると仮定することによって説明される。

以上のように、Homma (2019, 2020)では、外項・内項の QP の作用域の取り方に関して一見複雑な振る舞いに見える事例を観察し、事実を整理した。

4.3 他の検討課題

外項・内項 QP の認可方法に関する残された研究課題として、日本語において外項主語でも音声的な卓立を持つ場合に作用域が狭くなるという現象(Kitagawa (1994))の説明方法を検討した。音声的な卓立を持つ句の統語的認可方法については、英語・ドイツ語について Diesing (1992)が動詞句内での認可を提案しているが、このアプローチの応用によって日本語の上記現象を説明する可能性を検討した。

Homma (2022)はQP どちらの作用域、目的語 QP と否定 / 副詞句 QP の作用域についての日本語と英語の現象の説明を行なったが、(a)日本語の文構造において2種類の否定辞の位置を仮定したこと、および(b)不可視移動としての焦点移動(焦点素性の移動)を仮定したこと、の2点が理論的に望ましくないという問題点があった。このため、これら(a), (b)を仮定しない、より説明力の高い分析を目指した。

参考文献

- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 本間伸輔 (2018) 「日本語の所有者受動文における「目的語への繰り上げ」(raising-to-object)について」, 言語学特別ワークショップ「られる」と「らさる」の言語学, 筑波大学.
- 本間伸輔 (2019a) 「対格目的語数量詞句の作用域、特定性、格の認可について」, 竹沢幸一・本間伸輔他 (編) 『日本語統語論研究の広がり: 記述と理論の往還』くろしお出版.
- 本間伸輔 (2019b) 「数量詞作用域の統語論的分析: 数量詞句の形式、特定性と作用域」筑波英語学会招待講演.
- Homma, Shinsuke (2019) “A Note on Quantifier Scope in Japanese Passive Sentences,” 『言語の普遍性と個別性』10 101-113.
- Homma, Shinsuke (2020) “A Note on the “Outer Object” in Japanese Possessor Passives,” 『言語の普遍性と個別性』11 101-111.
- Homma, Shinsuke (2021) “Scope and Presuppositionality of Object QPs in Japanese,” 『言語の普遍性と個別性』12, 109-119.
- Homma, Shinsuke (2022) *Syntactic Determinants of Quantifier Scope in Japanese and English*, Niigata University. 210 ページ.
- Hoop, Helen de (1996) *Case Configuration and Noun Phrase Interpretation*, Garland, New York.
- Hoshi, Hiroto (1999) “Passives,” *The Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Natsuko Tsujimura, 191-235, Blackwell.
- Ishii, Yasuo (1997) “Scrambling and the Weak-Strong Distinction in Japanese,” *University of Connecticut Working Papers in Linguistics* 8, 89-112.
- Ishii, Yasuo (1998) “Scrambling of Weak NPs in Japanese,” *Japanese/Korean Linguistics* 8, 431-444.
- Kitagawa, Yoshihisa (1994) “Shells, Yolks, and Scrambled Eggs,” *Proceedings of NELS* 24. ed. by Mercè González, 221-239.
- Kuroda, S.-Y. (1979) “On Japanese Passives,” *Explorations in Linguistics*, ed. by G. Bedell, E. Kobayashi and M. Muraki, 305-347, Kenkyusha, Tokyo.
- Shibata, Yoshiyuki (2015) “Negative Structure and Object Movement in Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 24, 217-269.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Shinsuke Homma	4. 巻 12
2. 論文標題 Scope and Presuppositionality of Object QPs in Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個別性	6. 最初と最後の頁 109-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shinsuke Homma	4. 巻 11
2. 論文標題 A Note on the “Outer Object” in Japanese Possessor Passives	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個別性	6. 最初と最後の頁 101-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shinsuke Homma	4. 巻 10
2. 論文標題 A Note on Quantifier Scope in Japanese Passive Sentences	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個別性	6. 最初と最後の頁 101-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 本間伸輔
2. 発表標題 数量詞作用域の統語論的分析：数量詞句の形式，特定性と作用域
3. 学会等名 筑波英語学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本間伸輔
2. 発表標題 日本語の所有者受動文における「目的語への繰り上げ」(raising-to-object) について
3. 学会等名 言語学特別ワークショップ「られる」と「らさる」の言語学
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 遊佐 典昭、小泉 政利、野村 忠央、増富 和浩、他46名	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 400
3. 書名 言語理論・言語獲得理論から見たキータームと名著解題	

1. 著者名 HOMMA Shinsuke	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Niigata University	5. 総ページ数 210
3. 書名 Syntactic Determinants of Quantifier Scope in Japanese and English	

1. 著者名 竹沢幸一，本間伸輔他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 289
3. 書名 日本語統語論研究の広がり：記述と理論の往還	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------